2007年度授業改善研修参加レポート　　所属（　文学部　）　氏名　田子　健

「研修会等名称」

成績評価の厳格化とその支援システム

場所：同志社大学
期間：2008 年 3 月 10 日

１．研修の内容

同志社大学が、文部科学省特色ＧＰ「情報環境の整備と成績評価の厳格化」として行っている一連の事業の締めくくりとなるシンポジウム「成績評価の厳格化とその支援システム」に参加し、本学学生の学習環境の整備と成績評価のあり方について示唆を得ることが目的であった。参加者は 200 名を超え活況であった。

シンポジウムのプログラムは次の通り。

開会挨拶　八田　英二（同志社大学長）
基調講演　Alexander W. Astin(UCLA 名誉教授)
「教育の評価がいかにしてティーチングと学生の学びの向上につながるか」
パネルディスカッション
舘　昭（桜美林大学）「学位課程の確立と成績評価」
山本　浩（上智大学）「GPA 制度と成績評価の厳格化」
園月　勝博（同志社大学）「情報環境の整備と成績評価の厳格化」
―同志社大学の事例から―

基調講演では、Alexander W. Astin　氏の UCLA での豊かな教育経験から、日本で課題となっている大学教育の評価を授業や学生の学びの向上につなげるための原理的考察、また経験から導かれた方法の示唆が語られた。

パネルディスカッションでは、まず上智大学と同志社大学での GPA 制度の導入経緯と実際にどのような効果があり、どんな課題を自覚しているかについて、詳細なデータをもととした事例紹介が行われた。その後、このシンポジウムのタイトルでもあり、最近の中央教育審議会報告にもみるような「成績評価の厳密化」と GPA 制度との関係について続く討論で深められた。舘氏は、大学教育評価の専門の立場から、アメリカでの議論も紹介しながら、成績評価のあり方―厳密化と GPA はそもそも関係しているのか、も含め―について、興味深い論点を提示した。その後、フロアからすでに GPA を実施している立場からの質問や導入しようとしての研究プロセスの紹介があり、各大学で研究が進められている状況も明らかとなった。

２．研修の成果

私が、このシンポジウムを選んで FD 研修としたかったのは、現在、教職課程委員長を務めていることもあり、教職課程履修学生の水準をどのように向上させるのか、という課題意識からである。履修の開始から教育実習を経て、教員採用試験の受験さらに採用に至るプロセスは、学生の意志に基づく学習が基本となるが、一方、卒業した 4 月には「一人前の先生」として教壇に立つわけで、卒業までに意識と能力においてしっかりとした人物になってもらわなければいけないし、そうなってくれることを期待もしている。しかし、現に多様な履修希望学生があることから、何らかの履修基準を設定して質の吟味を行わなければ、こうした期待は実現しない可能性も高いのが現実である。

こうした思いで、GPA を活用して、教職課程履修者の水準の向上策を具体化するにはどうすればよいのか、ヒントを得たいと思い参加したのであるが、上智大学、同志社大学の実施例から、GPA 制度は、単に成績評価の問題ではなく、その大学として、教育理念とその具体化（カリキュラム）について、教職員相互の理解がなければうまく機能しない、言い換えれば、大学教育改革の進展状況を示す指標のようなもの、との感を強くした。「機械的に従来の成績を指標化して GPA にしても、それが成績評価の厳密化となる場合ばかりではない。成績評価の厳密化には、その前提として、教育理念の共有された教職員集団があり、熱意ある充実した学生本位の教育が行われ、学生の学習がどれだけ進んだか、を指標として表す GPA である必要がある」という舘氏の発言に深く学ぶところがあった。

結局、今回の研修では、私の「GPA を活用すれば成績評価の厳密化が可能」という理解が、単純なだけではなく正確ではなかったということに気付かされた。同時に、GPA と成績評価の厳密化とが対になる状況自体、シンポジウムのなかで議論されていたようにそれほど根拠はないということにもなる。つまり、A、B、C 評価と GPA 評価との対比は、大学の成績評価のあり方について、教師中心の講義の結果測定なのか、学生の学習による成長を記録する方法なのか、を問う視点を提供しており、今後、私も教育の理念、方法、学生の学習による成長等について、さらに研究を深めたいと考えた。そのプロセスで、冒頭の課題の答えも明らかになることを期待したい。

３．授業への研修成果の反映状況

研修の内容から、すぐに個々の授業に成果が反映するものではないが、教職課程運営のあり方について、今後吟味を進めたい。そのことを通じて、教職課程の授業全体の魅力の向上が実現するように、教職課程の責任者として努力したい。

学 部 長	ＦＤ委員長	ＦＤ委員会	企画・広報課長	係